

親鸞教學

追悼 金子大榮先生

金子大榮先生を追憶して —金子先生と『教行信証』—	松原祐善	1
追慕 金子大榮先生	寺田正勝	12
座談会『光輪鈔』を拝読して		27
	大屋憲一 鍵主良敬 寺川俊昭 広瀬 杲 細川行信	
<hr/>		
信仰と自律(2) —入出二門の源泉—	安田理深	61
獲 信	広瀬 杲	79
宗教と日常性	上田閑照	94
非僧非俗	曾我量深	113
<hr/>		
真言と解釈(1)	金子大榮	127
金子大榮先生略歴・著作目録		142

30

大谷大学真宗学会

『安樂集』に云く、真言を採集して、
往益を助修せしむ。何となれば、前に生
れん者は後を導き、後に生れん者は前を
訪ぶらへ。連続無窮にして、願はくは休
止せざら使めんと欲す。無辺の生死海を
盡くさんが為の故なり、と。

(化身土卷末)

編集後記

本誌『親鸞教学』は、今回をもって第三〇号を迎える。第一号が世に出たのは昭和三七年であるから、すでにあれから十五年の歳月が流れたことになる。本誌の編集に携わる私たちが改めて確認しなければならぬのは何か。このような想いが胸中をよぎる。そして心に浮ぶのはあの法蔵比丘の純真なる志願である。

為衆開法蔵 広施功德宝

常於大衆中 説法師子吼

この广大無辺の、無私の、生命あふるる法蔵菩薩の精神。本誌の願いは、法蔵菩薩の使命と不二のものである。

諸先生の講義、研究員や在学生の論文、それに学問の最前線に立つ他大学の先生方の講演——これらをふたたび読み返してみると、いずれも、自己の身に引き当てた、実存的な問いが貫かれているのが分る。決して私的で好事家的な関心が本誌を育ててくれた人々の基調ではないのである。この基調こそ、世俗の雑誌と絶対の一線を画する本誌の面目である。

当然のことながら、一人の人間が成長してゆく過程と同じように、本誌が歩んできた道程には幾多の紆余曲折がある。

政治的・文化的な諸情況、学園紛争、教団の混迷、そして曾我・金子両先生の逝去。しかしこれらの危機的な事態に遭遇するたびに、結局はひとつのことが本誌に問われたのではないだろうか。つまり教に対する姿勢が。

本誌にもシマンネリだとの声が聞かれるようになったら、それは編集する者の側に責任がある。マンネリに陥る危険はつねにある。事務的に物事を運びすぎると、いつか緊張を失い、感動を失ってしまうのだ。親鸞に真底共感しない者によって編集された『親鸞教学』は悲劇である。このようなことを改めて考え、改めて厳肅な気持ちになる。

* * *

金子先生が御往生の素懐を遂げられてからもう八ヶ月になる。本誌三〇号は、金子先生の遺徳を追悼して、特集号として編集することになった。執筆された二先生、座談会に御出席の先生方には、先師の恩徳を改めてお聞かせいただいた。厚く御礼申し上げたい。

京都大学の上田閑照先生には、昨年求真宗学会大会において御講演いただいたが、貴重なお話を掲載させていただいた。末筆ながら深い謝意を表する。(安富)

昭和52年7月1日 印刷
昭和52年7月10日 発行

親鸞教学 第30号 辛 650

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 広瀬 果
大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

中村印刷株式会社

電話 (313) 一〇468番

編集
発行

発売

印刷

親鸞教学

第三十号

昭和五十二年七月十日発行

大谷大学真宗学会